

お寺とご門徒とのつながり

— 阪神淡路大震災を経験したお寺のいま —

● 教団総合研究室における調査

浄土真宗本願寺派総合研究所・教団総合研究室（藤丸智雄室長）では、「浄土真宗本願寺派総合研究所規定」（平成二十四年宗則第十三号）第七条「宗門運営の総合的研究及び現況調査に関すること」に基づき、二〇一二年より龍谷大学や北海道大学などと共に寺院調査を行っています。

この調査では、「社会関係資本」（ソーシャル・キャピタル）という視点を元に、住職・坊守・ご門徒を対象とした聞き取りを行っています。※

● 大震災を経験したお寺

二〇一四年七月、兵庫県の阪神・神戸周辺地域（以下、阪神・神戸地域）に所在する一七ヶ寺を対象に、聞き取り調査を実施しました。この地域は、一九九五年の阪神淡路大震災により甚大な被害を受けており、地震や火災により全壊するお寺も多く、たくさんのお住職や家族・ご門徒が犠牲となりました。

このような状況のなか、お寺はどのような活動でご門徒との関係を再生させようとしたのでしょうか。第十回宗勢基本調査の結果から見ると、兵庫

教区は全国の中でも月忌参りが盛んな地域の一つとして挙げられます（七四・三％、全教区中十位）。当地の僧侶は、お寺の近隣だけでなく、震災後に移住した遠くのご門徒宅まで月参りに出向くケースもみられ、これらの努力が人と人をつなぐ契機となっていることが窺えます。

本調査では、社会関係資本の観点より、「失われたつながり」「変化したつながり」の検証を目的としており、阪神・神戸地域における僧侶やお寺の社会関係資本の内容、特に震災の発生前と後との状況に着目しました。

● 阪神・神戸地域寺院のソーシャル・キャピタル

今回の調査では、事前に得られた情報から、以下の項目を中心に聞き取り調査を実施しました。

- ① 月忌参りによる「つながり」の構築
- ② 「つながる」工夫を意識したお寺の活動
- ③ 震災による「つながり」の変化

ここでは、それぞれの概要をお伝えし、震災から二〇年を経過したお寺の「いま」を報告したいと思います。

① 月忌参りによる「つながり」の構築

まず、阪神・神戸地域の寺院の特色

表1 都市型寺院と農村型寺院の比較

	都市型A寺	農村型B寺
門徒分布	市全体	寺院所在集落に集中
住職家の収益形態	専業	兼業
法要準備	主に住職家	主に門徒
護持会計管理	住職家	門徒主導

を見てみましょう。本地区は都市部に位置づけられます。そこで、都市と農村のお寺の比較を表にまとめてみました(表①)。

A寺は神戸市に所在するお寺で、B寺はいわゆる過疎地域に所在するお寺です。B寺は所在する集落にご門徒が八割と集中

している典型的な「村のお寺」ですが、A寺のご門徒は市全域に広がっています。ご門徒宅の多くは車で三〇分の距離に所在し、中には一時間かかるご門徒宅もあります。収入は断然A寺が高く、収益形態も専業です。また、B寺は法要準備や護持会計にはご門徒が主体的に関わっていますが、A寺では主に住職家が担っています。お寺とご門徒について、A寺の住職は「この地域は」お寺ではなく住職についてくる」と語られましたが、本地区のお寺は、B寺のような農村型寺院と比べ、契約関係の要素が強いことが窺えます。つまり、ご門徒との関係が希薄であることが意識されており、つながりを強化しようとするはたらきがあることが特徴として挙げられます。

寺院活動に焦点を当てると、月命日にご門徒宅にてお参りする「月忌参り」に力を入れているお寺の多いことがわかりました。

C寺では毎日十件程度、月忌参りのためご門徒宅をまわっています。C寺の住職が「対話のあるところに信頼が生まれる」と述べられたように、月忌参りをご門徒との「つながり」の場として意識的に構築しようとしていいることがわかります。D寺の住職も「知らない人の葬儀より月忌参りを重視している」との語りから、新規の葬儀より日常の月忌参りを重視されていました。このように、当地のご住職のほとんどが月忌参りをおしてご門徒とのコミュニケーションをはからうとされている姿を確認することができました。

この意識の背景には、「住職とそりが合わなければお寺を変える」などの語りから、お寺とご門徒との関係が契約的であることが一つの要因として考えられます。また近年では、都市部を中心に直葬などが増加していることもあり、調査地の住職方は、現代社会の劇的な変化に非常に大きな危機感を持たれていました。月忌参りによる既存のご門徒との「つながり」の構築や強化は、こうした変化に対応しようとするお寺の試みであると考えられることができるでしょう。

② “つながる”工夫を意識したお寺の活動

今回の調査では、月忌参りなどの法務活動以外に、実に様々な寺院活動をご紹介いただきました。ここではいくつかの活動を取り上げながら、お寺とご門徒・地域住民とのつながりについて報告します。

兵庫教区では、例年、神戸別院でコーラスフェスティバルが開催されていることもあり、お寺の活動としてコーラスが多く挙げられました。このコーラス活動では、近隣の組の若坊守で構成されているものがあり、そのコーラス活動に参加していたことがきっかけとなって、自坊でも新たにコーラスグループを作り活動する流れとなったなど、つながりが広がっていく様子が窺えました。また、「総代の娘さんが音楽家なので、コーラスの指導をしてもらっている」といった語りもあり、ご門徒だけではなく、その周辺にまでつながりが波及していく様子が見られました。

先にも述べましたが、農村に比べ都市型のお寺は、契約関係の要素が強く、お寺とご門徒、ご門徒同士の関係が希薄であることが意識されていて、つながりを強化しようとするはたらきが強いことに特徴があります。このような特徴を踏まえ、つながる工夫を意識したお寺の活動として、寺報の中にご

門徒が営まれているお店や会社を紹介するという活動をご報告いただきました。この寺報を読まれているご門徒から「あそこのお店も〇〇寺さんのご門徒なんですね」といった語りがあり、お寺とご門徒、ご門徒同士の関係の強化に効果を及ぼしていることがわかります。

また、子ども会や土・日曜学校の活動を複数の住職よりご紹介いただきました。その中で特に印象に残ったのは、震災があった後、日曜学校の参加者だった方々がお寺のことを心配してすぐに駆けつけてくれたという話です。このことは、お寺の活動によって生まれたつながりが、震災時に活かされたといえるのではないのでしょうか。

③ 震災による“つながり”の変化

阪神・神戸地域の諸寺院において、震災はどのような影響を与えたのでしょうか。私たちの調査はわずかな例ですが、被災に直面されたお寺の一端を窺うことができました。

・被災直後のお寺

まず震災当時、多大な被害を受けられたお寺はどのような思いで過ごされていたのでしょうか。

E寺ではご門徒二五名、F寺ではご門徒三七名がお亡くなりになり、G寺では住職のご家族が亡くなったとい

う切実なお話を聞かせていただきました。F寺の住職によると、関連死はその三倍近くはあるのではないかとのことです。また本堂が全壊や半壊したお寺も多く、お寺が再建するに伴い、大きな課題を抱えられていたことがわかりました。H寺では再建したばかりの本堂が、震災により崩壊しました。お寺のことを熱心に支えてこられたご門徒は、その知らせを聞き、お寺の方角を向いて寝ることができなかつたそうです。またご家族を亡くされたI寺の住職は「親族を失った夜、余間て一回だけ泣いた。あとは一族を無くされたお釈迦様のことを心に思い、僧侶としてできることをと考えて生きぬいてきた。」と述べられました。

震災当時、余震が続いている間も、被災されたお寺は悲しみや恐怖の中を押して活動されていたことがわかりました。本堂や会館を開放し、ご遺体を安置する場として提供されたお寺が数多くありました。また住職やご家族は、自身が被災しているにも関わらず、ご門徒の安否確認や相談に走り回っておられたことがわかりました。さらにお寺のお風呂を開放し、地域に提供されたケースもあり、ご門徒のみならず、地域の方々に尽くしておられたことが確認できました。

被災地の住職は、ご門徒の相談に向き合いながら、自身は誰にも相談でき

ないという状況があったという声に接しました。ある住職は当時の状況について、「相談や思いを吐露する先はどこにもなかった」と振り返られました。また、震災による苦悩を抱えたご門徒からの相談は長く続き、震災直後だけでなくその後二十年間にも断続的に相談を受けていた住職もおられました。

・被災後を支えられたつながり

被災後のお寺の厳しい状況はどのようなつながりによって克服されていったのでしょうか。

「月忌参りは震災後も休まず続けた。その皆さんがつぶれた本堂の復興を言い始め、成し遂げてくれた」「本堂がつぶれた後に庫裏で過ごした。ずっとそこに来続けて一緒に立ち上がってくれたのは、日曜学校のOBだった」などの語りがありました。先ほどもふれましたが、月忌参りや日曜学校など震災以前から築かれていた寺院活動に基づくつながりがお寺の再建へと向かう力となったことを確認することができました。

・つながりの変化

震災という大きな苦しみの中、「震災直後が一番僧侶らしかった」「充実していた」との住職の声を聞きました。ご門徒や地域被災者との苦悩をともにわかちあうなかで、仏教者としての役割に邁進する光景が思い描かれま

す。ご門徒からも、「今までの付き合いは変わらず関係が続いた」など、災害を克服していくなかで、以前からのつながりが力となったことが確認できました。

震災によって失われていったつながりについて、多くのお寺の住職の声は厳しい現実を訴えるものがありました。「寺に親しい人が亡くなりつながりはむしろ弱体化した」「音信不通になり関係がきれた門徒も多い」など、従来より培ってきた「つながり」の修復がいかに難しいことを教えていただきました。

●おわりに

お寺の活動として、月忌参りと法務以外の諸活動を取り上げましたが、それぞれ意識的に「つながり」の構築や強化を実践していることが窺えました。こうした日々の活動が、震災などの非常時の際に、立ち直る大きな力となっていたのです。

その一方で、お寺は震災によって想像を絶する様々な苦悩を受け、そのお寺の相談をできる状況もなかったこと、また、人のつながりが断絶することにより、お寺の基盤が弱体化していたことなど、極めて重要な課題もみえてきました。

阪神・神戸地域のお寺から、日常の何気ない「つながり」を大切に、その

「つながり」を意識しながら活動していくことで、さまざまな困難を乗り越える大きな力となることを教えていただきました。

最後に、調査にご協力いただきましたご住職・坊守さま・ご門徒のみなさまにはお時間をいただき、貴重なお話を賜りましたこと、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

※社会関係資本とは、人と人との「つながり」や「信頼」を表す言葉です。無縁社会と呼ばれるほど、人間同士のつながりが希薄化した現代社会において、人間関係を結び直す場として、お寺の機能が再評価されています。『宗報』二〇一三年八月号 参照。

浄土真宗本願寺派総合研究所 坂原英見

那須公昭

小野嶋祥雄